

物語現代文学史

1920年代

大久保典夫

創林社

物語現代文学史

1920年代

大久保典夫

創林社

大久保典夫 (おおくぼ・つねお)

1928(昭和3年), 埼玉県生れ。早稲田大学国文科卒。現在, 東京学芸大学教授。

著書『岩野泡鳴の時代』『昭和文学の宿命』『耽美・異端の作家たち』等。

現住所一(〒173)東京都板橋区大山西町 9-10

物語現代文学史—一九二〇年代

一九八四年二月二日第一版第一刷発行

定価一八〇〇円

著者 大久保 典 夫

発行者 宮 西 忠 正

発行所 (株) 創 林 社

〒101 東京都千代田区三崎町二の一二の二

〔仮営業所 一九八四年一〇月まで〕
〒112 東京都文京区小石川一丁目三一—一六

電話東京八二三—五七六〇
振替東京〇一—二六五四五

須藤印刷 大口製本

©TSUNEO ŌKUBO

0095-0170-4281

序

この『物語現代文学史』は、西暦と元号による複眼の文学史というのが特色です。普通、日本においては、現在までの同時代史としての現代文学史に、〈昭和文学史〉とか〈戦後文学史〉とかの表題が使われていますが、〈名は体を現す〉ということ、わざの通り、実はこうした呼称はそのまま著者の史観を表現しているといえましょう。

〈昭和文学史〉でいちばん有名なものは、亡くなった平野謙氏のものですが、平野氏の場合、昭和二年七月の芥川龍之介の死から書き始め、実質的にはさらに遡って、関東大震災の翌年刊行された『文芸時代』と『文芸戦線』にまで筆を及ぼしています。

文学史叙述においては、〈起点〉をどこに置くかが重要な問題で、平野文学史では、昭和の新文学の出発点である上記二雑誌の創刊と、大正文学の終焉の告知としての芥川龍之介の死を重ね合わせたといえましょう。これはこれで一つの見方ですが、現代文学史としての〈昭和文学史〉でもっとも重要なのは〈世界的同時性〉という複眼で、そうした観点に立てば、第一次世界大戦終結後三年目の大正十年（一九二一）が起点ということになります。

第一次大戦後、ヨーロッパで前衛芸術の運動が起こり、それは日本にも波及して、平戸廉吉が、イタリアの詩人マリネットイの『未来派宣言』にならない、ほとんど直訳に近い文面の『日本未来派宣言運動』という一枚のビラを作成し、みずから日比谷街頭で撒布しました。ドイツの表現派映画、ロベルト・ウィーネ主演の『カリガリ博士のキャビネット』が輸入上演されたのも一九二一年（大正一〇）で、当時、大正活映という映画会社に関係していた谷崎潤一郎が、『読売新聞』紙上で激賞しました。

しかし、一九二〇年代の初年である二一年でもっとも重要な事件は、何といっても『種蒔く人』の創刊でしょう。これが一九二〇年代という世界主義（インターナショナルイズム）の時代のはしりになります。ついでにいうと、へ一九二〇年代」とは、二一年から三〇年までで、この考え方は、二十世紀が一九〇一年から始まり、昭和が昭和元年から始まるとする数え方と同じです。前者についていえば、われわれの先達の尾崎紅葉も正岡子規も、いや、あの田山花袋作『田舎教師』の主人公のモデルの小林秀三でさえも、明治三十四年（一九〇一）を「廿世紀第一年」と記しており、一九八〇年に当たって、八〇年代云々と騒いだ最近の自称文化人の歴史感覚の方がよほどおかしいのです。

『物語現代文学史』のアウトラインを簡単に説明すると、ヘジューネーブかモスクワか」というのが合言葉になった「一九二〇年代」は、日本においても、アメリカニズムとマルクシズムというインターナショナルイズムの最盛期で、その文学における具現が、横光利一・川端康成らの『文芸時代』にはじまるモダニズム文学運動と、『種蒔く人』『文芸戦線』『戦旗』へとつながるプロレタリア文学運動でしょう。満州事変（昭六）を起点とする「一九三〇年代」は、エグザイルズ・リターン（亡命

者の帰還)の時代、日本においては〈転向〉〈日本回帰〉の時代で、ナショナリズムが台頭したのは何も日本だけでなく、いわば世界的現象なのです。つづく大東亜戦争勃発にはじまる(一九四〇年代)は、前半が対米戦争、後半が対米従属の時代で、こうした観点に立てば、本多秋五氏の戦後文学史観の致命的な欠陥が奈辺にあるか、すぐ理解できます。

本多秋五氏の『物語戦後文学史』の史観は、簡単にいえば〈断絶史観〉で、昭和二十年(一九四五)八月十五日の〈終戦〉によって、日本民族が軍国主義の呪縛から解放されたとする解放史観・進歩主義史観です。しかし、はたして〈八・一五〉によって日本人のベイシツクな生活や思考が一変したでしょうか。それよりも、大方の日本人にとって〈八・一五〉はまず何よりも〈敗戦〉であり、生活意識の下層において、〈戦中〉〈戦後〉は地続きであったといえます。〈八・一五〉は、〈敗戦〉であるとともに、軍国主義の呪縛から自由になったという意味で〈解放〉であり、こうした複眼で〈戦後〉を把握ることこそオーソドックスな歴史把握といえましょう。これを別の言葉でいえば、〈連続〉と〈断絶〉の複眼による史観ということです。

目次

序

「歌のわかれ」の青春	11
潤一郎・春夫・龍之介	18
へ小田原事件への発端	25
『痴人の愛』	30
『種蒔く人』の創刊	36
有島武郎の立場	43

『宣言一〇』論争	48
階級芸術論の進展	55
内容的価値論争	64
散文芸術論争	69
『三等船客』と『獄室の暗影』	74
多彩な労働文学	76
『暗夜行路』の連載	78
『多情仏心』と『子を貸し屋』	81
関東大震災と菊池寛	83
『文芸時代』の創刊	85
新感覚派論争	92
新感覚派の文学理論	100
『日輪』の出現	104
『花園の思想』まで	111

『十六歳の日記』の世界	116
『招魂祭一景』の位相	121
『伊豆の踊子』	126
『氷る舞踏場』その他	130
岸田国士と稲垣足穂	133
犬養健と池谷信三郎	135
同人雑誌の作家たち	137
井伏鱒二と片岡鉄兵	140
今東光と『不同調』	143
『文芸戦線』と青野季吉	145
目的意識論争	154
ナップ成立まで	161
林房雄・一九二六年	166
葉山嘉樹の出版	173

『海に生くる人々』 178

逃亡兵・里村欣三 183

黒島伝治の反戦文学 185

「喪章を売る」女たち 193

文芸批評方法論争 200

本格小説と私小説 208

宇野浩二の私小説論 215

自然主義作家の心境小説論 218

佐藤春夫と心境小説 220

「小説の筋」論争 225

芥川龍之介の死 232

あとがき 243

索引

物語現代文学史

一九二〇年代

「歌のわかれ」の青春

中野重治に『歌のわかれ』という青春小説がある。一九三九年（昭一四）、雑誌『革新』に連載された自伝的作品で、片口安吉という主人公が金沢の旧制高校（四高）を一年落第した四年目の夏ごろから始まり、もう一年落第して、五年かかって卒業し、関東大震災から半年後の春、東京の大学に入學してきて数カ月のころまでが描かれている。年代の上からいえば、大正十一年（一九二二）夏から十三年夏のころまでの約二年間の芸術青年の歩みが描き込まれているわけだが、シュトゥルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）の時代ともいえる一九二〇年代前半の知的青年の青春をテーマにしているわりには、いかにも牧歌的な感じがする。

これは一種の芸術家小説で、この作品を書くとき、作者の中野重治は明らかにゲーテの『若きウェルテルの悩み』（一七七四刊）を意識していたといつていい。誰にでもすぐわかるのは、「片口安吉にとって一種不可思議な町」である金沢の町が、『ウェルテル』に描かれたワールハイムの丘とダブリイメージで捉えられていることだ。ウェルテルは本（教養や知識）を厭い、自然を愛し、古代ギリシヤ的なワールハイムの風景を好んで絵に描くボヘミアンだが、その点、わが片口安吉もまった

くよく似ている。ウエルテルも、自分の好みにあったホーマーからオシアンにいたる古代叙事詩に読みふけるが、落第生の安吉も、文芸雑誌や『万葉集』以後の歌集などを好んで読み、また、金沢の風景を愛しそれを油絵で描くのを趣味としている文学青年だ。安吉にもウエルテルにとつてのロッセに当たる頼子という恋人（？）がいるが、この頼子はロッセの像と違って淡彩に描かれ、ゆきずりに知り合い許婚があるのも知らずに苦しめた彼女、おそらく結婚してか結婚するためにブタベストへ去っていった彼女の存在は、この青春小説の性格を解くカギといつていい。

このある意味でリリカルな青春小説で注目されるのは、金沢の町がじつに細密に描かれている点に象徴される視覚的イメージの強烈さだが、頼子の像は茫漠として捉えがたい。単刀直入にいえば、この捉えがたさこそまさしく抒情としての「歌」なのだ。「頼子につながっていた長い間の気持」が、「どこかへ溶けてなくなつてゆく」と「短歌とのお別れ」が重なるわけで、それが同時に、牧歌的な金沢の町との別れにつながる点がミソといえよう。

金沢における片口安吉のボヘミアン生活については、こう書かれている。

「しかしすべては河であり、丘であり、樹木であり、風景であつた。安吉には、まる四年半いたこの町に、一きれのどきんとするような記憶もなかつた。彼は勉強したか？ しなかつた。恋愛をしたか？ しなかつた。この町に関するかぎり、何か町の生活、場末の人々と親しくでもなつたか？ ならなかつた。そしてそう考えること自身、田山花袋にでもありそうな感傷的でダルな回想だつた」

『歌のわかれ』は、「鑿」「手」「歌のわかれ」の三章から成り、これは第二章の「手」のなかにある記述だが、何と『若きウエルテルの悩み』の第二巻に描かれたウエルテルのワールハイム体験の

回想と遠いことか。岩波文庫版『若きエルテルの悩み』（竹山道雄訳、昭二六刊）の訳者「解説」に、「第一巻は幸福な日々の中に悲劇の因がひそみきたったところを叙し、第二巻は悲劇の展開を（すべて主人公の心理の中で）叙し、第三巻たるべかりし『編者より読者へ』は破局を叙している」とある。その通りだが、第二巻には、官吏になったウエルテルの任地での現実への絶望と、それに平行してワールハイム（その象徴がロッチ）への熱い想いが描かれているのだ。

それと重ねていえば、『歌のわかれ』で頼子が淡彩に描かれているのは、片口安吉の金沢体験そのものの中身のなさを物語っているといえよう。これこそ、中野重治が彼の芸術の原理論といっている『素樸』ということ』（昭三）でいう「せっぱつまった状態は中身がつまっている」と逆の墮落した状態ではないか。

端的に言えば、金沢時代の中野重治は、一九二〇年代という激動する時代の気流のなかで、いわばエアープケットに近い場所に低迷していたといえよう。しかし、この無風状態の空間にも時代の胎動は聞こえてきたはずで、『歌のわかれ』のなかにも、関東大震災についての次のような挿話がある。

ある夜、片口安吉は同じ文学仲間の鶴来金之助（窪川鶴次郎がモデル）と飲み歩いて、香林坊をのぼってブラジルというカフェーでしゃべっていた。日曜のせいで珍しく兵隊の姿なども四五人まじっている。

『何てったって、片口なんかア儲けもんしたんだからな。去年落ちないで大学へ行ってみろ。地震にその面じゃア……危い、危い。』

奇声を発して金之助は手を振った。それは安吉も認めていた。あのどさくさの時に東京にいた

としたら、朝鮮人そっくりの顔をした彼はどんな危険にさらされたか知れたものではなかった」

これを中野重治より一年四カ月歳下で、大正十二年（震災の年）の四月、熊本の五高から東京帝大法学部政治学科に入學し「新人会」の活動家であった林房雄（本名、後藤寿夫）の回想と較べてみよう。両者はともに後にプロレタリア文學運動の有力な働き手になり、林が転向して以後、その歩みを百八十度異にするが、北陸の農村生まれの中野と南国大分生まれの林とでは、時代に対する反応もまったく違っていたようだ。

『文學的回想』（昭三〇刊）によると、林はその年の夏休みに郷里の大分市に帰り、その小さな町に共產主義の種をまこうと必死に運動したが、うまく行かず、ひとり煩悶しているうちに夏休みが終わり、そして、あの九月一日の関東大震災の報に接したらしい。

林の文章でおもしろいのは、「帝都一瞬にして焼け野原と化す」「富士山陥没す」「社会主義者にひきいられた朝鮮人大部隊、軍隊と交戦中」「江東方面に市街戦、当局鎮圧の見込みなしと語る」「皇太子殿下御行方不明」という今日ではまさに噴飯物の地方新聞の記事を読んで、彼が、とっさに、東京に市街戦、すなわち革命が起こったと感じ、自分ひとりが立ちおくれたと思い込んだことである。

「田舎の町をつまらない啓蒙運動に無駄な労力をつぎこんでいる間に、革命が起こってしまった。上京の日をちょっと繰り上げれば、間に合ったものを、わずか一日か二日の差で、革命の落伍者となり、階級的裏切者となってしまうた」。

彼はあてどもなく山のなかを歩きまわり、海岸へ出て、そのころはまだ飲めなかった酒を飲み、